

精神医学理論の本質：心・脳問題

- ➡ 心身相関の4つの哲学的理論（17世紀の偉大な哲学者たち）
- ➡ ① Leibnitzの心身並行論（psychophysical parallelism）：支持しがたい；相互作用認めていない。事実と反する
- ➡ ② Decartesの心身二元論（psychophysical dualism）相互作用
- ➡ ③ Hobbesの唯物論theory of materialism ;物質の实在, a.reductionism
b.epiphenomena説（付随的二次説）
- ➡ c.創発emergence説（システム理論）(むしろ多元論,層理論)
- ➡ ④ Spinoza mind-body identity説心身同一論 同一過程の異なる理解の仕方
- ➡ (Aviel Goodman:Organic Unity Theory:The Mind-Body Problem Revisited.Am J Psychiatry 148(5):553-563,1991)

Seelenzustand, kein Vorstellen. Wie es zu diesem werden kann — dies Räthsel wird wohl ungelöst bleiben bis ans Ende der Zeiten und ich glaube, wenn heute ein Engel vom Himmel käme und uns Alles erklärte, unser Verstand wäre gar nicht fähig, es nur zu begreifen!

この〈心脳問題の〉謎は、解明されないままきつと最後まで残るであろう。たとえ今現在天使が舞い降りてきて、この謎を余すところなく説明してくれたとしても、人間の理解力をもってしてはそれでもちんぷんかんぷんでしかないだろう。

Griesinger W (教科書第2版, S.6, 1861)



1817-1868

精神医学統合理論と精神医学的統合人間学

フランスの碩学故 Henri Ey の理論の私の再定式化の試み

- ①organo-dynamism(器質<有機>・力動論) をorgano-psychodynamism (有機・精神力動論) として再定式化
有機・精神力動的人間学の構築
- ②「心的存在」=実存的形式, 自由への道
自由性の病理学 (Ey)
- ③有機体の下層と上層 下部構造は上部構造を規定, 上部構造は相対的自由, 自律(N Hartmann,V Franklとの共通地盤)

Eyの器質・力動論の中心,始原的定式からの出発, 再定式化の試み (J Kageyama,2017)

➡ 「私の器質・力動論的考想の中心に(au centre), 少なくとも研究と進展のための**枢軸的指針 (une orientation axiale)**として存在している問題の全ては, 一方では**心的存在の構造と構造解体の**, 他方では**脳(cerveau)の組織化と組織解体**との, <これら両者の> **分節的連関 (l'articulation)** に存在している」 (1963,p.756)

➡ 「この新しい視座において明瞭なことは, 精神諸障害は脳の病理学に全面的に依存しているとはいえ, これらの『決定因子』(déterminant)や『条件』(conditonnement)と精神諸障害とをあっさりと同一視できないということである。**神経系の組織化は心的存在の組織化なのではなく, 前者は後者の必要条件にすぎず,** 心的存在の活動自体にかなりの**遊び**を, もしこう言いたいのなら**自由性**を残しており, これにその**相対的自律性**をもたらしている」(同)

➡ 「こうして心的存在の構造解体はその陰性形式において脳の組織解体に依存しているが, それはまた必然的に心的活動の働き, 固有の力動に依存している」(同)

➡ このことは別の観点からすれば, 「説明」と「了解」(Jaspers)の相補的關係, 弁証法を主張していると考えられる。

Table L'organo-dynamisme(= L'organo-psychodynamisme = L'Organodynamisme-psychodynamisme)

(J . Kageyama,2017)

A. physiologie/psychologie (ontogénèse)

1. organisation de l'organisme psychique=organisation organique-organisation psychique=organo-dynamisme

(signification de <-> de l'organo-psychodynamisme = l'écart organo-psychodynamique

2. organisation organique =organisation de l'organisme(cerveau)=organodynamisme

3. organisation psychique =champ de la conscience-personnalité

(signification de <-> de champ de la conscience-personnalité=l'articulation dialectique)

B . pathologie(<étio>-pathogénie)

1, désorganisation de l'organisme psychique = désorganisation organique- désorganisation psychique

(signification de <-> organo-psychodynamisme de processus négatif = l'écart de désorganisation organique- désorganisation psychique)

2. désorganisation organique = désorganisation de l'organisme(cerveau) =organodynamisme négatif

3. désorganisation psychique (globale) = désorganisation de champ de la conscience-personnalité =la condition négative= structure négative fondamentale= délire négatif (état primordial de délire) =symptoms négatifs(s. primaires ; E.Bleuler) = bouleversement total du système de la réalité(pathologie de la réalité)

4. organo-psychodynamisme sous la condition négative =l'écart organo-clinique(mouvement positif)→symptoms positifs(s. secondaires ; E. Bleuler)= délire positif(expérience délirante ,Délire), Hallucinations, etc.

(signification de <-> d'organo-psychodynamisme sous la condition négative= l'écart organo-clinique)

* 生理学的「個体発生的有機・精神力動的隔たり」(l'écart organo-psychodynamique ontogénétique)は「病理学的器質・精神力動的隔たり」(l'écart organo-psychodynamique pathologique)や陰性条件における「器質・臨床的隔たり」(l'écart organo-clinique)の前提条件である。病理学的これら二つの「隔たり」とは生理学的「個体発生的有機・精神力動的隔たり」の病理学的状態での発現様態である。

**器質(有機)・(精神)力動論(L'organo-(psycho)dynamisme)には生理学的組織化, 病理学的解体における精神力動(psychodynamisme)と器質(有機)力動(organodynamisme)が含むよういまれ、両者は弁証法的分節的連関をしめす。

*** デリール (le délire) は「陰性デリール」(le délire négatif) (structure négative fondamentale= bouleversement total du système de la réalité= état primordial de délire =pathologie de la réalité)と「陽性デリール」(le délire positif) (le vécu délirant ;délires aigus , Délires chroniques)に分けるべきある。

****<étio>pathogénie は後期Ey理論における病因論の表記の消失を反映している。

影山任佐：器質・力動論と有機・力動論的人間学

丁度その頃、2010年当時のことだが、2011年の国際犯罪学会神戸大会での全体会での基調講演の準備のために、犯罪学に関する幾つかの最近の文献を読み進めていた。その中の一つが、我々が後に邦訳することとなるLillyら³⁰⁾の犯罪学理論の教科書第3版(2002)で、その「序文」によれば、第2版(1995)になく、第3版で新たに追加された項目の一つが、「犯罪の統合理論」(Integrated Theories of Crime)であった。この「統合理論」構築を目的にし、これに基礎づけられた実践をも展開する犯罪学、つまりは、犯罪の統合的原因・発生論とこれに基づく包括的、統合的対策・処遇論は総合犯罪学から区別されるべき**「統合犯罪学」**(Integrative (Integrated) Criminology)と言うべきではないか、という構想が筆者の脳裏に浮かんた。その頃、つまり2010年にこの教科書第3版を読み始めてから、さらにはその後、この第5版の翻訳を進めながら、統合犯罪学考想に対する確信は私の中で次第に強まった。そして、当時これらの用語、概念が既存のものかどうか、探索し、目を通したOxford³¹⁾等の英独仏日の当時の幾つかの主要な犯罪学事典や教科書には「統合犯罪学」(IC)や「総合犯罪学」(CC)の項目や用語や概念について当時触れたものは目を通した限りではなかった(註1)。つまり、「総合犯罪学」(CC)と「統合犯罪学」(IC)の考想は筆者において、2010年に殆ど同時期に構想され始めたもので、**「総合犯罪学」(CC)の延長に「統合犯罪学」(IC)を想定し、「統合犯罪学」(IC)の基盤に「総合犯罪学」(CC)を想定したものである。**後述するように、**両者は不可分のスペクトルの移行関係にある。**統合犯罪学(IC)は総合犯罪学(CC)の定式を基盤とするもので、後者抜きには前者は内容を失い、存在しえない。これらの用語、概念の提唱者として自戒を込めて云うのだが、言葉だけの「総合犯罪学」、「統合犯罪学」は内容空疎で、学問的には無意味である。また言うまでもないが、これらは他人や外国からの借り物の概念、考想でないことは以上の経過から明らかであろう。こうして、2011年の国際犯罪学会で、開催地アジア、そして日本からの世界への発信との思いも込めて、これらの考想、アイデアを全体会基調講演で発表した^{14,17)}。

総合犯罪学 (CC)の定義

Definition of the “Comprehensive Criminology”

J. Kageyama (2013)

Multidisciplinary Approach

多角的（総合的・集学的・多専門的・総合科学的）

Multidimensional (Bio-Psycho-Social) A.

多次元的（生物・心理・社会的）

Multi-elemental (offender, victim, society, environment) A.

多要因的：（加害者・被害者・社会／環境）

新しい「総合犯罪学」（Comprehensive Criminology）の定義（影山，2013）

統合犯罪学 (IC)の定義・定式

Integrative Criminology=Integrated Theory/Practice・Integrative Anthropology↓



Fig. 1 Definition of the “Integrative Criminology” ↓

(J. Kageyama, 2013)↩

総合犯罪学 (CC)と統合犯罪学 (IC)の関係

Comprehensive Criminology
Pluralism/Electicism

Multidisciplinary Approach

Multidimensional A.

Multi-elemental A.

(offender, victim, society)

<-----Spectrum----->

Partial Integrated Theory

(bio-social, psycho-social A.)

<life-course criminology>

Integrative Criminology

Integrationism

Total Integrated Theory

(bio-psycho-social A)

(Kageyama's Model, 2017)

Fig.2 Spectral relations between Comprehensive Criminology and Integrative Criminology
(J. Kageyama, 2017)

統合犯罪学：総合犯罪学 (CC) が礎石

統合犯罪学 (IC) = 統合理論 (BPS) ・ 統合的実践

総合犯罪学 (CC) ・ 統合犯罪学 (IC)

J.Kageyama(2011)

両者はスペクトルの移行関係

総合犯罪学 (CC) <-----> 統合犯罪学 (IC)

三種のアプローチ

(多科学的・多次元的・多要因的)

折衷論

包括的実践

総合人間学(CA)

部分的統合理論

全体的統合理論

統合的包括的実践

統合人間学(IA)

二つのプログラム（生物的と実存的）

人間が生物学的存在を超えて人間的存在になるには遺伝的、生物プログラムに加えて、第二のプログラム、存在論的プログラム、判りやすく言えば、人生のプログラムが不可欠である、と思う。

■ 「志を実現する力」 「志」とは、野心・向上心と理想・目標（プログラム）を指しており、これを実現するのが、現実自己（才能・技能）であると演者は述べてきた。人間力とは志を抱き、これを実現する力である、と思う。

1. 「人生のプログラム」と「社会的絆」・「満足の遅延化」

➡ A. 「人生のプログラム」とMarunaの犯罪離脱理論

- ➡ ところで、人生の転機には人生のプログラムの組み替えが不可欠でもある。どのような人生のプログラムに組み替えるのかは決定的に重要である。次のようなことも、シナリオをプログラムの一種と見なせば、これはプログラムの組み替えの一貫と見なすことも可能であろう。そしてこれは犯罪学理論における「救済（回復）の台本理論」（Theory of Redemption Script）となる

Sh. Maruna (2001,2005)の「救済（回復）シナリオ理論」 (Theory of Redemption Script)

- 常習犯は実際変わりうるものなのだろうか？ つまり修復（making good）可能なのか？ 前科者はいかにして彼らの人生を修復し，再建するのか？
- Liverpool 犯罪・非行停止（離脱）群研究（Liverpool Desistance Study）
- 犯罪と薬物使用を停止した群，（足を洗った群：going straight）と現在も犯罪行動を継続している群との比較
- 両群で唯一の違いは彼らの人生のプログラム，シナリオの違いであった。
-
- 個人の物語（personal narratives）のcommon types二群に分類
- ①決定論的シナリオ”condemnation “script(宣告のシナリオ)=active offenders
- ②非決定論的,変化のシナリオ “generative “script（生成（変化）のシナリオ）
- 犯罪停止（離脱）＝社会復帰中に生成シナリオを強化することにかかっている。
- アプローチ 認知・行動
- ナラティブ
- V Frankl 実存分析：逆境での残された選択の自由，価値実現
- 後述する演者の「統合的精神療法」そのもの